居住環境の変化とオープンスペース利用行動に関する分析

東京工業大学大学院　学生員　　桟敷　美帆
東京都立大学大学院　正会員　　山川　　仁
東京都立大学大学院　正会員　　高見　淳史

１．はじめに

都市の高密化により都市内のオープンスペース（以下ＯＳ）は減少してきた。高齢化や余暇時間の増大などの社会的要因も影響し、ＯＳの重要性は見直されている。身近な自然の減少によって人々は、不足している自然を希求し、失われた自然環境を補うための行動を起こすと考えられる[1)]。本研究は、ＯＳ整備の基礎的な研究として、「現在および過去の居住地とその環境」と「ＯＳ利用行動」との関係を明らかにすることを目的としている。

２．調査の概要

本研究では、東京近郊の緑の多い地域と少ない地域から次の**表１**のように対象地域を選び、アンケート調査を実施した。アンケートは各地域に 1000 部、合計 4000 部配布した。回収部数は全地域で合計 439 部、回収率は 11.0%であった。調査項目を**表２**に示す。

３．居住環境評価について

自宅とその周辺の居住環境 11 項目についてその満足度を+3～－3 の７段階で現在と過去について尋ねた。

表１　アンケート対象地域

地域名	浦安市	府中市	墨田区	豊島区
緑の多さ	緑多い	緑多い	緑少ない	緑少ない
緑被率	16%	27%	9.4%	10.6%

表２　アンケート調査項目

アンケート項目	内容
属性	性別･年齢･職業･家族人数など
現在の居住環境	住居の形態･住居面積･居住歴など
現在の居住環境評価	居住環境の満足度評価 図１の 11 項目について
現在のＯＳ利用	「近く」と「遠く」のＯＳの利用回数
過去の居住地･居住形態	居住地域、住居の形態
過去の居住環境評価	現在の居住環境評価と同じ
ＯＳ利用意向	「近く」と「遠く」のＯＳの利用意向

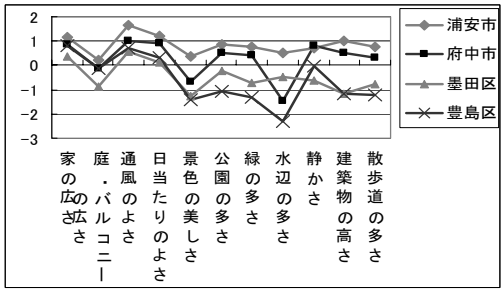

図１　現在の居住環境満足度評価

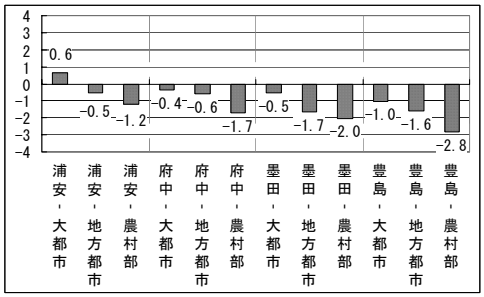

図２　居住環境変化平均値

現在の各地域の居住環境満足度評価の平均は豊島･墨田区が低く、府中･浦安市が高い（**図１**）。

現在の居住環境評価から過去のそれを引いたものを居住環境変化値とし、11 の評価項目を単純平均したのを居住環境変化平均値とする。現在同一地域に住んでいても過去に大都市、地方都市、農村部に住んでいた人の順で居住環境の満足度の減少が大きくなっている（**図２**）。

４．ＯＳ利用行動

次の言葉を下のように定義する。

ＯＳ･･･公園・緑地など緑の多い場所
「近く」･･･徒歩や自転車で行けるところ
「遠く」･･･徒歩や自転車で行けないところ

１）現在と過去の居住地と平均利用回数

図３(左)より「近く」のＯＳの利用は自宅周辺のＯＳの状況に最も影響され、充実したＯＳがあればよく利用し、ほとんどない場合はあまり利用しないことが分かった。また、現在と過去の居住地別に見てみると、現在同一地域に住んでいても過去に「大都市」に住んでいた人よりも「大都市以外」に住んでいた人のほうが「近く」のＯＳの平均利用回数が多いことが分かった。

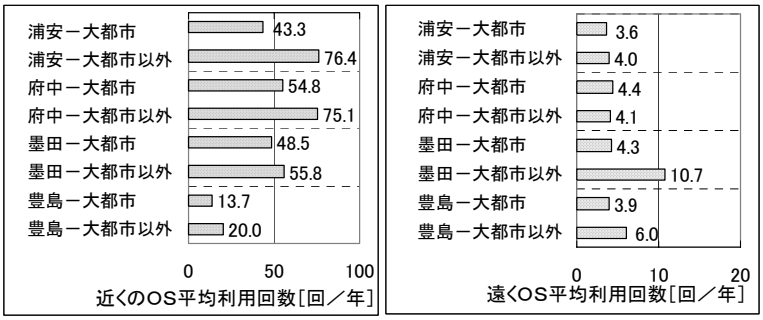

図３　現在と過去の居住地域別ＯＳ平均利用回数

キーワード：オープンスペース，居住環境，アンケート調査
連絡先：〒152-8552　東京都目黒区大岡山 2-12-1 東京工業大学大学院情報理工学研究科情報環境学専攻
（TEL：03-5734-3196，FAX：03-5734-3821）

これは、過去に「大都市以外」に住んでいた人、つまり居住環境がより大きく悪化した人のほうが、自然などの不足を補うための行動として、ＯＳ利用が多くなっているものと考えられる。「遠く」のＯＳは、比較的緑が豊かな浦安･府中地域は過去の居住地での差がほとんどないものの､豊島･墨田地区では差が大きくなっている（**図３(右)**）。

２）「緑の多さ」の満足度と平均利用回数

現在と過去の各居住地域に分けた 12 グループごとの「近く」のＯＳ利用回数と現在の「緑の多さ」の満足度評価の関係を**図４(左)**に､「遠く」のＯＳ利用回数と過去から現在への緑の多さの満足度評価の変化量(＝現在の緑の多さの満足度－過去の緑の多さの満足度)の関係を**図４（右）**に示す。「近く」のＯＳでは現在の緑の多さの満足度が大きいほどＯＳを利用し､「遠く」のＯＳでは過去に比べ現在の緑の多さの満足度評価の減少が大きいほどＯＳを利用している傾向があることが明らかになった。

３）ＯＳ利用に影響を与える要因について

ａ）「近く」のＯＳ利用について

「近く」のＯＳの利用頻度が「月に２回未満」と「月に２回以上」の２つを外的基準として数量化２類分析を行った（**図５**）。結果として、現在の居住地周辺の緑の多さに満足している人や過去に比べて緑の多さの満足度が減少した（緑が少なくなった）人、年齢の高い人ほど｢月に２回以上利用｣していることがわかった。また、居住環境評価 11 項目を用いて主成分分析を行い求めた因子得点を『居住環境総合評価』､またその変化も同様にして求め『居住環境変化総合評価』として、これらを「緑の多さ」の代わりに説明変数に用いて分析しても同様の結果となった。

ｂ）「遠く」のＯＳ利用について

「遠く」のＯＳについても、利用頻度が「年に４回未満」と「年に４回以上」の２つを外的基準として、ａ）と同じ説明変数を用いて数量化２類分析を行ったところ、ａ）ほど顕著ではないが、緑の多さの満足度と総合評価についても同様の結果が得られた。「遠く」のＯＳは、身近な緑に満足していない人ほどそれを補うために利用が多いのではないかと考えたが、そのような結果は得られなかった。しかし、現在の居住地域をみてみると、緑の少ない墨田区･豊島区の人の方が「年に４回以上」利用する傾向があるという結果は得られた。

５．まとめ

本研究により、現在と過去の居住地やその居住環境の変化がＯＳ利用行動に影響を与えていることが明らかになった。現在の住居周辺に緑が多ければそれを享受して「近く」のＯＳを積極的に利用し、また総合的な居住環境や緑の多さの満足度が減少している人ほど「近く」と「遠く」のＯＳを積極的に利用していることが分かった。

【参考文献】

１）畔柳昭雄・渡辺秀俊,「都市の水辺と人間行動―都市生態学的視点による親水行動論」, 共立出版株式会社, 1999

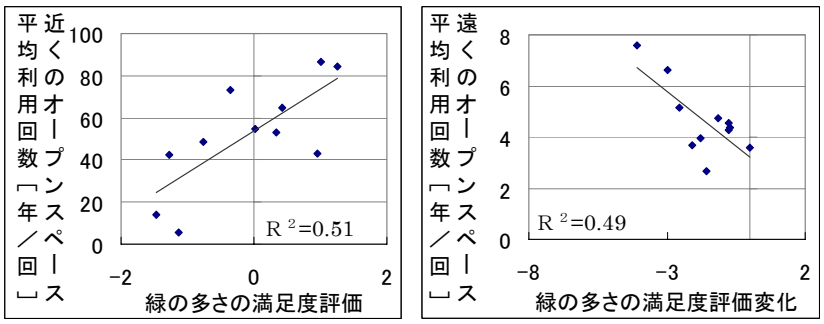

図４　オープンスペース利用と緑の多さの満足度評価

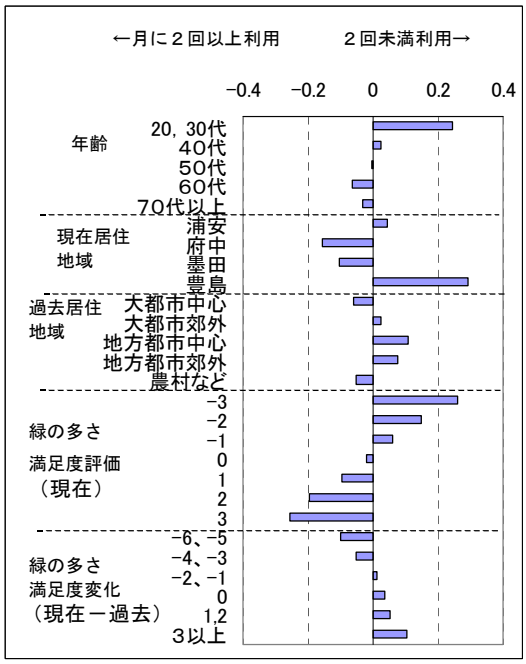

図５　ＯＳ利用に影響を与える要因